

<自分らしく>暮らせるまちを<地域連携 ビジョン>をともにつくり実現しよう！

団塊世代が後期高齢期を迎える「2025年問題」を見据えるならば、その人その人で異なる生活支援ニーズが地域に増大することが予測されます。これらに対応するため、地域に住み暮らす人どうしがかかわりあう、自在で柔軟なたすけあいのしくみづくりが求められています。こうした問題意識から生活クラブ生協、神奈川 W.Co 連合会、(社福)いきいき福祉会の共同研究として、2014年、2015年の2カ年に亘り研究会活動が進められました。

制度のみに頼ってはられない現実が広がる中で、参加型福祉による「オルタナティブな地域包括ケアシステム」の実現に向けた2年間の活動経過を踏まえ、2016年度は、ワーカーズ・コレクティブ (W.Co) メンバー有志、生活クラブ、神奈川 W.Co 連合会、NPO 法人 W.Co 協会、社会福祉法人いきいき福祉会からの参加を得て、地域での活動に結びつけていくことを目的に、当研究所の自主研究会として活動を進めました。

自主研究会では、3つのエリアを設定し(茅ヶ崎市、横浜市西区・保土ヶ谷区、川崎市幸区)、研究会メンバーが中心になり、地域の生活クラブ運動グループによる検討を基に、「地域連携ビジョン」を作成しました。また、研究会活動の「報告書」をまとめ(2017年2月)、意思ある団体・組織による「地域連携ビジョン」作成と、たすけあい・支えあいのアソシエーションである「(仮)チームたすけあい」づくりの議論・検討の促進に向け、「提言」を行いました。

本年3月には、「地域連携ビジョン」と報告書と提言の共有化と議論の促進を目的とし、「参加型福祉まちづくりフォーラム」を開催しました。フォーラムでは、佐塚玲子さんをコーディネーターに迎え、各「地域連携ビジョン」のまとめ役である3人のパネラーと、生活クラブ生協の城田喜子さんをコメンテーターに「トークセッション」を行いました。

本誌では「トークセッション」の一部を紹介します。
(編集部)

<出席者>

●スピーカー

西田美智子さん(茅ヶ崎市) <まちづくりユニット茅ヶ崎、NPO 法人 W.Co 一心ケアマネジャー>
中村久子さん(横浜市保土ヶ谷区・西区) <NPO 法人 W.Co ぐっぴいケアマネジャー、W.Co はっぴいさん 理事長、NPO 法人ワーカーズ・コレクティブ協会理事長>
木村満里子さん(川崎市幸区) <NPO 法人 W.Co メロディー理事長、神奈川 W.Co 連合会理事長>

●コーディネーター

佐塚玲子さん <NPO 法人よこはま地域福祉研究センター長>

●コメンテーター

城田喜子さん <生活クラブ生協(神奈川)副理事長>

地域のケア力を高めるには？

西田 私が活動している茅ヶ崎の生活クラブ運動グループの組織は、子育て支援、高齢者福祉サービスなどの事業を行っている団体と生活クラブ生協組合員を数えると、2,000人くらいになります。その団体が参加する茅ヶ崎のローカル・ユニット(地域の自主的な連携組織)で一緒に何かをやっていくと様々な意見が出て、結構大変なこともありますが、立ち止まって考えることができるというメリットもあります。これをやりたいという人の意見を尊重しながら、どうしたらやっていけるんだろうかということに聞く耳を持つメンバーが、茅ヶ崎は大ぜいいると思っています。そういう輪をつくっていくためには、顔と顔を合わせて話し

合う場をたくさん持つことがすごく重要だと思います。

中村 私自身が生活クラブの組合活動の中から「参加型福祉」を知って、家事介護サービスを行う W.Co を19年前に立ち上げました。スキルも自分自身も磨きながらやってきたという経過があります。日常の中で培われている生活クラブ組合員の子育てや家事・介護のスキルをブラッシュアップすることで、住んでいる地域の誰かの役に立つということ、また自分の考えを発信していくことができるということをもっと伝えていきたいと思っています。

以前は組合活動の中で情報交流が行われていたのですが、今は個人情報保護等のこともあって、地

域の組合員交流のきっかけが少なくなりました。でも、時々会う組合員の方々は、とても感性が豊かだなと感じています。生活クラブの中の活動に留まらず、さらに地域社会にも発信する市民であってほしいと思います。

木村 介護や福祉は特別なことではないと思っています。今、川崎市の地域密着型のデイサービスを運営していますが、民生委員さんや町内会の方など、地域の方々と一緒に運営推進会議をやっていきます。W.Co メロディーは 15 周年を契機に、常設の居場所、たまり場を確保していこうと、現在運営推進会議の方を含めて地域の 32 の団体・個人と一緒にやりませんかと声をかけをしています。ネットワークを広げながらすすめていきたいと思っています。

城田 福祉について、誰にとっても特別なことではないという意識をつくっていくには、三つのステップが必要かなと考えています。

まず一つは地域の課題に気付くことです。それぞれ自分自身が抱えている問題が、他の人との共通の問題、地域の問題であるということに気付くことです。地域の問題が、ちょっとした力を出したり支え合ったりすることで解決できることを、自分自身が行動してみて気付くことが二つ目のステップだと思います。

その 2 つのステップを越えることで、自分も参加してみよう、地域の中で仲間とともに何かを解決していく主体になっていこうということにつながっていくのではないかと考えています。

佐塚 共感や気づきの場が必要ということですね。築 45 年の団地で、朝、ラジオ体操とセットでモーニングサービスを出している所があります。なかなか外に出てこない独り暮らしの方の交流を考えた 82 歳と 69 歳の方が、たった 2 人でやってるんです。サラダと焼きたてパンとコーヒーとスープというメニューなんです。大ぜいの方が参加されています。それを見た人が、6 月から 10 月ぐらまで、月に 2 回ほどビアガーデンを始めました。82 歳の方が、「やってみてできなかったら、やめればいいからね。そういう感じでできたら、地域の身近な支え合って広がるんじゃないかな」とおっしゃったことが印象的でした。

中村 人と人が出会って、誰かの役に立てていることの喜びというのか、自己肯定感みたいなものが積み重なる中から、諦めない、投げないという気持ちも出てくるのではないのでしょうか。

木村 今、デイサービスが休みの第 3 日曜日を使って、地域の方が気軽に立ち寄れる「ほっとサロン」を開いています。先日、横浜国大と共同で行った W.Co メンバーと利用者を対象とした「ダブルケア」の実態調査から見えてきたニーズにもあるのですが、ふらっと立ち寄れる場所の中で、地域の人のつながりをつくるなど、安心して暮らせる地域をつくっていきたくと思っています。

佐塚 居場所などでいろいろ話をしているうちに、自分が今大変な状況になってるんだなって、気付く人もいるかもしれませんね。

西田 私たちの W.Co では育児の支援もやってますし、「さいとうさんち」という地域の居場所には、赤ちゃんとか若いママ、高齢者の方たちなど多世代の方が来ます。ボランティアさんの中にも、子どもは苦手、高齢者はいいとか、子どもならいいとか、いろんな方がいます。でも、その人たちが地域で今起きていることを見たり聞いたりして気付いて、地域に戻る。そういう場から市民一人ひとりの力量が高まっていくと思っています。

佐塚 いろんな方が来ていいよっていう場所を設けると、そこには様々悩みがあって、いろんな問題があるんだというようなことに気付かされる。ボランティア側のほうも、磨かなくてはいけないスキルに気付くということがあるのでしょうか。

こうして切磋琢磨していると、ケア力が高まってくるのではないかと思います。

中村 相談できる相手がどれだけいるかということが、すごく大事だと思うんです。

いろんなことに対して偏見を取り払って、人と人とのつながりをたくさんつくっていくことが自分の財産になり、地域のケア力の高まりにつながると思います。そして、そのつながりをつくるために居場所が必要だと思います。

地域に有用な「(仮)チームたすけあい」や拠点を実体化していくために

西田 「チームたすけあい」という言葉を、今日初めて聞いた方もいると思いますが、多分私たちがやっている活動と、別のものではないということをお話ししたいと思います。

老若男女が集う居場所「さいとうさんち」は、茅ヶ崎のローカル・ユニットに所属する団体を中心になって運営委員会をつくり、お金を出し合いながらスタートしました。現在、子ども食堂を開くなど、いろんな活動に広がっています。「チームたすけあ

い」は、それと同じように、生活クラブの組合員同士で何かたすけあいができるのではないかという発想で提案されているものです。

例えば生活クラブ生協の共済制度の子育てコーディネーターは、依頼を受けて預かる人を探しますが、なかなかマッチングが難しいこともあります。でも、普段から顔が見える関係があれば、そこで安心して預けたり、預かることができると、実感として分かります。こうした関係づくりは、居場所でもいいしサロンでもいいのですが、お金があるなしに関わらず、どこでもできるのではないのでしょうか。例えばデイサービスの利用者の中には、そこで活動できる人がいるかもしれません。

中村 今の時代、協同組合や非営利市民事業でやってきたことを、もっと地域の中で広げていくチャンスであると思っています。

お金では買えない価値を交換し合う、人と人がたすけあうことで、初めの一步を踏み出していく。「人の話だけなら聞けるよ」ということから共感者を増やしていくようなことが、地域の中で現場に即してできることがあると思います。そして生活クラブ運動グループに関わっている団体が「そうだよ」と大きなところで合意して、後押ししながら進めていくことが重要だと思います。私たちも覚悟をしてやっていきたいと思っています。

佐塚 私がデイサービスの職員だった12年前。ちょうど介護保険が始まったころですが、90歳と89歳のゲートボール仲間の方が、介護保険講座を聴きにいられたんです。「まだ今は必要ないけど、これから必要になる」と。そしたら「こんなに困ってる人がいっぱいいるんだったら、私たち、何か手伝いたい」とおっしゃってくださったんです。92歳の方は、「囲碁もマージャンも将棋もできる」、89歳の方は「私、耳が遠くないのが取りえなので、人の話なら聞ける」と。お二人とも職員顔負けの人気のボランティアさんになりました。

木村 私の所属するW.Coでやっている活動を点から面に広げていくためには、個々の団体・組織のヒト、モノ、カネを共有の財産と考えて進めていきたいと思っています。例えば、少しお金に余裕があれば、資金が必要なW.Coに融通するとか、保育園などに人(W.Coメンバー)をまわしたりもしています。そうすることで地域で活動が広がり、話し合いが活発にできるといいと思っています。

居場所、たまり場をつくることによって、そこに寄ってくる人たちが、今度、助ける側にもなるのではないかと思います。また、その人たちが

活躍できる場も形にしていきたいと思っています。やはり地域に向けた発信力がすごく大事だと考えています。

城田 生活クラブの組合員という立場で言うと、共済制度などで組合員同士のたすけあいを経験した人たちが、その経験を基に、広く地域に目を向けていくことが大切だと思っています。福祉はハードルが高いと思われがちですが、身近な体験がステップになると思っています。生活クラブは、組合員同士の閉じた世界の中でのたすけあいを進めていくと受けとられがちですがけれども、経験したことをより広い視野を持った活動に参加するステップにしていくことも、一方では大切だと考えます。

佐塚 今の時代は、自己責任で乗り切れるかを考えると、格差や分断を抜きには語れないと思います。少し前でしたら、それほど相手を自分とは違うと考えなかったかもしれませんが、もはや今の時代、生活のためにアルバイトをいくつも掛け持ちしているような高校生が、勉強だけしている高校生に対して、とても自分と共感できる相手とは思わないかもしれません。また、勉強だけしている学生が、バイトで働きづめの高校生に対して共感的な感情を持ってないかもしれません。

このままだと、10代のうちから格差・分断が定着し、お互いを理解し合えない世代を生んでしまうのではないかと危惧します。子どもは6人に1人が相対的貧困ですけども、高齢者はすでに5人に1人が貧困です。これからの子どもたちにとって、「共生社会」という言葉が名ばかりのものになりはしないかと恐れを感じます。これから、生活クラブの活動の中でも、しっかりした信頼関係があるチームをつくっていくことが、大事になるのではないかと思います。

今日の格差社会は自己責任だけでは乗り切れないでしょう。今、何が起きているのか、皆さんで見定めながら、どうやってたすけあいに変えていくかということを考えなければいけないのではないかと思います。そのためには、どういうチームをつくっていくのかということ、考えていく必要があると思います。

司会 みなさま、本日はありがとうございました。それぞれの地域でどんな連携をすすめ、どんな地域社会をつくっていくか、まちづくりをしていくかという議論を、ぜひ、今日から始めていきたいと思っています。

(文責：編集部)